

〔書評〕

安田 章著

## 『中世辞書論考』

一

前 田 富 祺

安田章は、昭和三十五年から昭和五十四年にわたって発表した朝鮮資料に関する論考をまとめて、昭和五十五年に「朝鮮資料と中世国語」として刊行した。<sup>注1</sup>朝鮮資料は国語史の研究には欠くことのない重要な資料であるが、いろいろな性格の異なったものがあり、成立の過程にも明らかでないところがあつて、取り扱いはなほだ困難な資料であつた。「朝鮮資料と中世国語」は、福島邦道によつて、「犀利にして緻密な考察により、国語史学の一大新生面を切り開いたもので」、「すぐれた語学力と広い資料探究との綜合によつて織りなされた綾羅のごとき論文集となつて」おり、「それらの性質をよく知悉して<sup>注2</sup>いる安田章ならではの出来ない研究であると高く評価されたのである。

『中世辞書論考』は「朝鮮資料と中世国語」の姉妹篇とも言うべきものであつて、研究の中心は朝鮮資料と節用集とで異なつてはいるが、広い資料探求と緻密な考察によつて同様に高く評価されるものである。中世、日本において編集された節用集は、性格の様々なものが残されており、諸本の関係も複雑であり、語彙研究のための

資料として利用する場合にも慎重にそれぞれの節用集の性格に配慮して取り扱うことが要求されるのである。しかし、従来、そのような配慮が十分であつたとは必ずしも言い難い。私などもそのような反省はしつつも、「日常用いるように語彙を集めたもの」であるという既成概念にとらわれていたのである。これに対して、安田章は節用集の成立の過程や節用集に様々に関わった人々の層を考究し、節用集のみならず、多くの中世辞書が聯句連歌の流行に関わる「韻事の書」としての性格を持つていたことを明らかにした。その点で、本書の中心をなす古本節用集の研究のまとめは、「はしがき」に「辞典的な一答案」として示されているところによつて窺うことが出来る。ここでは、安田章は、「書名」「組織」「諸本」「編者」「価値」に分けて簡潔に考えを示している。その全体を紹介したいところであるが、紙数の関係でそのうち「価値」のところだけを引いておく。

〔価値〕従来より「古訓を尋ね、言詞の変遷を知るべき資ともなりぬべければ、言語学に於て必用のものなるべし」(小中村清矩「我國の辞書」といった見方で、節用集は、室町時代語の有力な資料として重要視されている。橋本博士の研究を承けた山田忠雄氏は、諸本の類化を進める一方で、先代の辞書からの影響関

係、当代の言語資料との関連についての考察を深めて、節用集と色葉字類抄との交渉を指摘し、弘治二年本の増補資料として、源氏物語千鳥抄・詞林采葉抄・有林福田方・盛囊抄などを示したが、それは、節用集の言語の性格を明らかにすると共に、節用集をめぐる言語生活の立体化にも通じた。独特の長所として辞書発達史上に特筆すべきものがないにも拘らず、節用集が室町時代に盛行したのは、それまで個々独立していた、公家・武家・禅林の三社会の文化が融和してゆく趨勢の象徴としての聯句連歌の流行に関わっていた韻事<sup>注5</sup>の書であったからであろう。当代文化を反映するものとして、古本節用集に文学の立場からの検討を要するのは、この点においてである。

(傍線は前田が附した)

節用集については、私もこれまでにいくつかの解説をまとめたことがあるが、それを長々と引用して恥を曝すことはすまい。私のまとめた答案との違いは傍線を引いた部分において明らかである。

もちろん、古本節用集の始まりに安田章の言うような「韻事の書」としての性格があったとしても、それ以後の節用集の発展をどう考えるかということは別の問題である。その点では増補改編がどのように行われてきたかということとは依然として問題であり、本書でも取り上げられてはいるが、節用集の諸本の性格をそれぞれに考えてゆくことの必要性は変わっていない。また、天正十八年本、易林本などと板行されるに至っては「一般の人々の文章活動の助けとなるもの」という性格を持って<sup>注6</sup>いた<sup>注6</sup>ことも認められよう。

いずれにせよ、橋本進吉の「古本節用集の研究」、山田忠雄の「節用集天正十八年本類の研究」<sup>注8</sup>について、ここに節用集の実態に迫る

うとする本が著されたことは有難いことである。そして、これまでの節用集研究がどちらかと言えば増補改編の過程を明らかにし諸本の関係を考究するところに中心があったのに対し、安田章の研究は中世辞書に関わった人々の言語生活の中で把え直そうとしているところに特色が認められるのである。ところで、言語生活の中で把え直すということは、中世辞書の性格を考えるための一つの観点というに止まるものであろうか。それとも国語辞書史というものは国語学史、もしくは言語生活史の一部に入るものと考えられるのであろうか。私が「語彙研究資料としての節用集」<sup>注9</sup>をまとめた時には、もちろん安田章の研究に比すべくもない小論ではあるけれども、国語語彙史を考えるための資料としての性格を知りたいという気持があったのである。安田章のたびたび引用する「古訓を尋ね、言詞の変遷を知るべき資ともなりぬべければ、言語字に於て必用のもの」という「在り来たりの見方で辞書に接する」<sup>注10</sup>だけではいけないとしても、それを超えたところからふたたび「言詞の変遷」の考察に至ることが望まれるのではないか。その点では、本書に所収の論考でもつと言語の問題について触れてほしかったとも思うのである。<sup>注11</sup>

## 二

書評というものは、本を読んでいない人に内容を知らせるという面もあるであろうから、本書の内容についても紹介しておきたい。ただ、後にも述べるように、本書は、すでに別に発表された論考をほぼそのまま所収した論文集という性格を持っている。本書所収の論考十八篇のそれぞれは、独立したものとも言えるのであり、全体の構成を概括して紹介することは難しい。しかし、明確な部・章に

分けられていないが、目次の行間に余白を残したり、本文中の論考の末尾と次の論考との間に余白の頁を作るなど、おのずから構成が現れるように意を尽している。したがって、著者の意に添うならばこのままの形で考えるべきであろうが、参照の都合上、ここでは私なりの判断で五部に分け番号を付して示しておく。また、後に述べるように、元の発表がどういう形でいつごろのものであったかが問題なので、そのことを括弧に入れて示しておく。

I

- ① 辞書の復権（『国語国文』第五十巻第六号 昭和五十六年六月）
- ② 語彙研究資料としての通俗辞書（『国語と国文学』第五十五巻第五号 昭和五十三年五月）
- ③ 辞書の層（『国語国文』第四十六巻第四号 昭和五十二年四月）
- II
- ④ 増刊下学集（『天理善本叢書』和書部『第五十九巻 昭和五十八年一月』）
- ⑤ 吉沢文庫本節用集（『女子大国文』第七十九号 昭和五十一年六月）
- ⑥ 天正十七年本節用集（『天理善本叢書』和書部『第五十九巻 昭和五十八年一月』）
- ⑦ 枳園本節用集（『天理善本叢書』和書部『第二十一巻 昭和四十九年一月』）
- ⑧ 原刻易林本節用集（『天理善本叢書』和書部『第二十一巻 昭和四十九年一月』）

III

- ⑨ 塵芥（『清原宣賢白筆』 昭和四十七年十月）
- ⑩ 宣賢卿字書（『分類体辞書宣賢卿字書』 昭和四十七年十二月）
- ⑪ 天正十七年本運歩色葉集（『京都大学国語国文資料叢書』第一巻 昭和五十二年十二月）

IV

- ⑫ 源語研究史における「藻塩草」の位置（曾沢先生古稀記念『叙説』 昭和五十四年十月）
- ⑬ 藻塩草の命名（『古活字版藻塩草』 昭和五十四年十一月）
- ⑭ 藻塩草の諸本（『古活字版藻塩草』 昭和五十四年十一月）
- V
- ⑮ 和漢聯句と韻書（『論集日本文学・日本語3中世』 昭和五十五年六月）
- ⑯ 中国資料の背景（『国語国文』第四十九巻第九号 昭和五十五年九月）
- ⑰ 天理図書館蔵「十一韻」の書入（『ピブリア』第七十五号 昭和五十五年十月）
- ⑱ 韻字の書（『国語国文』第四十七巻第一号 昭和五十三年一月）

Iは昭和五十二年から昭和五十六年に発表された三篇の論考で、本書の総論的なものである。①は「連歌用書も節用集も韻事という基盤を同じくして、『当代の言語生活の重要な一環をなして来たもの』とする時、文学・語学のいずれの観点からも、節用集について再認識が迫られている」ということをまとめとする。中世辞書に関わった人々の関わり方を考え、またそれぞれの辞書の性格を考える

ことにより、「知識層の」「韻事の場における」「実用書」であるとして  
いる。②は節用集が通俗辞書と呼ばれることが妥当かどうかを検  
討し直したものである。「塵芥」・広本などの性格を検討することに  
より、「連歌と聯句との結合としての和漢聯句の盛行が、漢の側から、  
節用集に代表される通俗辞書を生み出したと言えないであろうか」  
と述べるに至っている。なお、「江戸時代の節用集で、ヨモヤマに、  
『四極山』を配するものは少くないであろうが」（二三頁）の注に「寛  
文の増補下学集も『四極山』を持っていて、節用集に限らないであ  
ろう。」と記しているが、「増補下学集」のこの部分が節用集からの  
増補であることは先に明らかにしたところである。③は特に「宣賢  
卿字書」の成立の検討を中心として、辞書に関わる人の階層が「狭  
いものであったこと」と「辞書の、相互に重なり合うものの、段階  
的に、従って累層をなす」ことを明らかにしようとしているのであ  
る。これらの論考はここに配列されている順番とは逆に③②①の順  
でまとめられたものであり、そこに著者の考えが発展してきたこと  
が窺えるのである。いずれの論考もいろいろな中世辞書を広く取り  
上げるばかりでなく、多角的に広い視点から考察を進めていること  
ろが評価されるのである。

Ⅱは昭和四十九年から昭和五十八年にわたる論考で⑤を除く四篇  
はいずれも古本節用集の影印に附せられた解題である。Ⅲは⑨「塵  
芥」、⑩「宣賢卿字書」、⑪天正十七年本『運歩色葉集』のそれぞれ  
影印に附せられた解題である。Ⅳは『藻塩草』の影印に附した解題  
⑬⑭と『藻塩草』が源語研究集成的な価値を有することを明らかに  
した論考⑫とから成る。したがって、ⅡからⅣまでは、古本節用集、  
その他の中世辞書の解題を中心としているわけである。もちろん解

題とは言え、それぞれに要をつくして的確に内容をまとめるとも  
に、新しい視点からの検討を加えて優れた論考となっている。ただ  
先にも述べたように、国語史的資料性、言語的事実について述べる  
ことを控えているのは、解題としての性格を考へてのことであろう  
が、残念であると言わざるをえない。論考⑫の最初のところに述べ  
られた、

或る文献を国語史研究資料として決めてかかる以前に、その文  
献の背景を様々な角度から眺めておかなければならない——こ  
の手続きを国語史資料論と称するならば、当代文化の所産たる  
節用集と並べて、藻塩草も検討する必要がある一度はあるであろう。  
という言葉は、著者の考え方の基本を示しているように思われる。  
ここでは『源氏物語』研究との関わりで『藻塩草』の資料性を論じ  
ているわけであるが、同様にⅡⅢの資料性を論じた部分がⅠに当た  
ることになる。

Ⅴは昭和五十三年と昭和五十五年の論考四篇を合わせたものであ  
る。⑮の「和漢聯句と韻書」の題から窺えるように、古本節用集が  
「韻事の書」であることとの関連で取り上げられたものである。そし  
て、和漢聯句に関わるといふことで、⑯⑰⑱の論考が収録されてい  
るのである。この分野の資料は私の十分理解するところではないの  
で、一々の論考の紹介は差し控えたい。

このように眺めてきたときに、ようやく本書の全体の構成を私な  
りに理解することが出来た。しかし、私の理解が安田章の意図に添  
うものかどうかは分らない。その点で言えば、一書としてまとめる  
以上、どういう意図でどういう構成で編集しているかについては、  
私などにも分る形で示してほしいかつたようにも思うのである。

これまで述べてきたように、『中世辞書論考』は、昭和四十七年から昭和五十八年にわたって発表された十八の論考から成っている。

所収の論考は、古本節用集を中心として各種の辞書の国語資料としての性格を論じたものがあり、辞書の編集の過程や構成を明らかにしたものがあり、また資料の影印に際して附した解題もあって、それぞれにまとめ方は異なっているが、いずれも著者の広い識見と緻密な考察によって支えられた珠玉の論考である。一で述べたように、特に古本節用集を中心とする中世辞書の「韻事の書」的な性格を明らかにしたところは、それがどの程度まで当時の辞書に一般化出来るかはそのかかととして、辞書全体のあり方を反省することなく辞書の中の語例を単に用例として引きがちな私どもの安易な態度を戒めるものであった。その点でだけでも、本書は、中世辞書を研究する者ばかりでなく、それらの辞書を利用する者にとっても熟読玩味すべきものとなっていると言えよう。

ただ、「最小限の統一を図つた外は、旧稿を殆んどそのままに印刷することにした」(本書「あとがき」による)ものなので、ここで取り上げられた資料についてはその論考の発表以後どのような研究が行われているかを確かめてゆく必要がある。その点では、『朝鮮資料と中世国語』を批評した福島邦道の「新組みの本なのだから、もつと親切であつてもよいのではないかと評者には思われる」という意見は、そのまま本書についても当てはまることであろう。もつとも福島邦道の批判に対しては、安田章は、

複数の旧稿を調整又は補修するとなると、多大の時間を要する

上に、当時参照することを怠つていた諸文献の存在を当初から知つていたかのように記しがちであり、踏むべき手順を踏まなかつた汚点は、初出の論稿が湮滅したとしても拭い去ることは出来ないから、研究者としても不誠実であるという非難を甘受することに於て、「言語学に於て必用のもの」といつた初期の見

方から脱し切れていない記述、己がたどたどしい、時にはあらぬ方に向けた足跡や足踏みの跡も消してしまわないで、それはそれで残しておこうと判断した結果である。「あとがき」による)と述べている。旧稿を参照しつつ単行本をまとめようとする時にどうすべきかについては、いろいろな考え方があろう。旧稿をそのまま所収するという立場もあろうが、徹底的に改稿してまとめ直すべきだという考え方もあろう。その間には、適宜取捨して、適当なところで妥協するということもありうるが、安田章はそれを潔しとせず、旧稿をそのまま所収することを原則としたのである。しかし、先に引用した安田章の「あとがき」は謙辞に過ぎるものであつて、それぞれの論考はきわめて完成度の高いもののように思われる。その点では、その後の研究を多少付け加え補注とする程度に後学の者のために「親切であつてもよい」のではないかということは、私も感じたところである。ただ、そのような妥協をしなかつたというところに、著者の厳しきがあると言ふことも出来よう。

本書の書評を出すことがこれまで遅れたことについては、著者に対して読者に対しても申し訳ないことであつた。言い訳がましくなるが、本書のそのようなまとめ方が書評する場合の視点を定めにくくしているということもあつたのである。書評も展望も国語学史の研究に属するものであるというのは、私が前々から主張していた

ところである。<sup>注13</sup> 国語学史において研究を評価し位置づけるためには、その研究の行われた時代における研究の時代的意義を考えることが必要であり、他方ではその分野の研究が完結したという立場に立つてその中における研究の位置を評価するということが必要となつてくる。一般の研究書の書評をする場合には、その本の成立時の形で考えれば良いわけであるが、本書の場合はそれぞれの論考をそのままとめられた時代において評価するとともに、本書の形でままとめられたことの意義を考えねばならないのである。ただ、前者が学界展望、学界時評において行われていることを考えれば、書評としては後者を中心にすべきだということも出来るように思う。別の見方をすれば、本書自体の中に著者自身の考え方の発展があるわけであるから、これを一つの研究史として考えることも出来る。評者としては、視点を定めることが出来ないまま本書を眺めて往昔日を送つて今に至つたところである。本書の形でままとめられた理由は、本書の構成と「はしがき」「あとがき」によって察しなければいけないというのかもしれないが、本書が独立した本として評価される以上、やはりもう少し手を入れてほしかったというのは今の私の気持である。

#### 四

安田章の考え方によれば、中世辞書をそれ自体で虚心に眺めることが第一であり、成立時の言語生活においてどのように編集されたかのように利用されたかを考え、その中にはじめて国語資料、あるいは文学資料として参照すべきだということになる。まさに王道をゆく考え方である。本書はそのような立場で研究の基盤を作つた

ものとなつていたのである。次はこれを基盤としてどういう方向に研究を進めてゆくのかということである。このような研究を他の多くの辞書についても進め、更に各時代の研究が完成したとして、そのような辞書史というのは、どういう意味の歴史となるのであるか。辞書研究は国語資料論という基礎学に止まるものなのであるか。辞書はその当時の国語意識を反映するものであり、そのような意味での国語意識史、更には国語学史に入るものとなるのであろうか。<sup>注14</sup> あるいは要素史的な見方に反対する時枝誠記の考え方にしたがつて、言語生活史的に位置づけるべきであらうか。

これらのことについての安田章の考えは行間に示されているのかもしれない。しかし、私の読みの浅いせい、十分に明確には読みとることが出来なかつた。また、本書はそのようなことを示す場ではないと考へておられるのかもしれない。あるいは、史料をして歴史を語らしむという立場をとつておられるのかもしれない。いずれにせよ、本書を一つの出发点としてままとめられる今後の研究の期待されることである。

注1 安田章『朝鮮資料と中世国語』（昭和五十五年七月、笠間書院）。

注2 福島邦道「安田章著『朝鮮資料と中世国語』」（『国語と国文学』第五十八巻第五号、昭和五十六年五月）。

注3 特に近世の節用集を中心としてであるが、前田富祺「語彙研究資料としての節用集」（『国文学言語と文芸』第六十六号、昭和四十四年九月、『国語語彙史研究』所収）でも、そのような考え方を述べたことがある。

- 注4 前田富祺「古本節用集」(『国語学研究事典』)の解説。  
注5 注4に同じ。また、前田富祺「節用集」(『国語学大辞典』)の解説。  
注6 注5の拙稿の「評価・影響など」のところを参照。  
注7 上田万年・橋本進吉「古本節用集の研究」(『東京帝国大学文科大学紀要』第二、大正五年)。  
注8 山田忠雄「節用集天正十八年本類の研究」(『東洋文庫論叢』第五十五、昭和四十九年)。  
注9 注3に同じ。  
注10 「はしがき」の本稿引用の部分参照。なお、「あとがき」にも引かれている。  
注11 解題であるためかもしれないが、たとえば本書一六三頁に「岡田希雄氏のことばを引いておけば、『国語学的考察は、……複製本さへ見れば、誰にでも為さうとすれば出来る事だから、わざわざ言及するにも及ばぬと云へる』。」とあるなど述べることを押さえる傾きのあることは、私など安田章の知見をもっと知りたいたいと思う者にとっては残念なことであった。  
注12 前田富祺「『増補下学集』の増補語彙について統貂」(『国語史学の為に』笠間書院)。  
注13 前田富祺「昭和39・40年における国語学界の展望——古代——」(『国語学』第65集、『国語学彙史研究』所収)など。  
注14 前田富祺「国語学彙史研究」の第一部I「国語学彙論史の研究」を参照。  
注15 本書の五十五頁以下を参照。  
(昭和五十八年九月十日発行 清文堂刊 A5判 四一六頁 九六〇〇円)